

令和元年6月18日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25293436

研究課題名(和文) 気持ちよさをもたらす看護ケア理論の創成

研究課題名(英文) Theory Development of comfort Nursing

研究代表者

縄 秀志 (Nawa, Hideshi)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：90254482

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,500,000円

研究成果の概要(和文)：「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識モデルを創出した。看護ケアの目的は、患者と家族の絆をケアに活かしたい、患者との信頼関係を基に患者の希望をかなえたい、看護師としてプロを自負したいであった。ケアに対する患者の反応は、意欲と生活拡大による自信獲得、気持ちよさによる感謝の心、コミュニケーションチャンネルの開放および豊かな対人関係の形成であった。看護師の反応は、患者と共にあるケアへの満足感、ケアへの自信と意欲、チームでのケアの共有、および看護観の醸成であった。ケアの効果は、単独のケアや1回のケアよりも組み合わせのケアや複数回のケアで得られることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により「気持ちよさ」をもたらす看護ケアの価値を示すことができた。特に、医療現場の多忙さの中で日常生活ケアが切り捨てられている状況を鑑みると、「気持ちよさ」をもたらす看護ケアが患者との信頼関係を築き、患者の希望を叶えるために行われ、その結果、患者の意欲と生活拡大による自信獲得や豊かな対人関係の形成をもたらされることが明らかになったことで、日常生活ケアを積極的に実施することが患者のQOLの向上につながる効果的な方略として臨床で取り入れるべきであると主張したい。また、看護師の満足感や自信と意欲がもたらされることから看護師の職務満足度の向上やバーンアウトの防止策としての意義もあると考える。

研究成果の概要(英文)：We develop the model of Comfort care. The purpose of nursing care to bring comfort is to make use of the bond between the patient and the family for the care, to fulfill the patient's wishes based on the relationship of trust with the patient, and to pride the professional as a nurse. The patient's response to care was the development of motivation and self-confident, feeling of gratitude, the opening of communication channels and the formation of rich interpersonal relationships. The nurse's response was with the patient's satisfaction with the care, confidence and willingness to care, sharing care with the team, and fostering a sense of nursing. The effects of care were found to be obtained with combined care and multiple care rather than single care.

研究分野：基礎看護学・看護技術学

キーワード：気持ちよさ 看護ケア comfort 患者の反応 看護師の反応 ケアの効果

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

看護実践・看護技術の本質的な基本的要素として「安楽」は看護学教科書に記述され、看護実践家にも認識されてきたが、安楽・安楽ケアとは何かを説明する研究の着手は遅れていた。臨床看護師の安楽・安楽ケアについての認識を質的研究から明らかにし、「安楽」の概念モデルを創出した(佐居, 2011)。安楽の英訳として用いられている「Comfort」の概念分析(英文献64)をもとに「Comfort(ケア)」概念モデルを創出した(縄, 2006)。

また、我々は、看護技術・看護ケアのエビデンスの構築を目指し、腰背部温罨法、モーニングケア、手浴などの介入研究を実施していた。これらの介入研究の成果を概観すると、提供する看護技術は異なっても、介入効果として対象者に共通して抽出されたことは、「気持ちよさ」を基盤とした意欲や活力の高まり、苦痛症状の緩和、および活動性の拡大などであり、各介入の有用性が示され、これらの効果は、「Comfort(ケア)」概念モデル(縄, 2006)のComfortの属性と帰結に含まれるとも考えられ、各自で積み上げてきた看護ケアの研究成果を統合することで、新たな看護ケア理論が構築できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

「気持ちよさ」をもたらす看護ケアにおける研究成果を患者にもたらされた効果、看護師の認識、患者と看護師の関係性の3局面から統合し、「気持ちよさ」をもたらす看護ケア理論(看護ケアモデル)を創成することを目的とした。

- (1)目的1: 過去5年間の国内の「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに関する文献の研究成果を統合し、理論の中核となる看護ケアの効果を構成する概念と要素を抽出し構造化する。
- (2)目的2: 看護師は、「気持ちよさ」をもたらす看護ケアによる患者の反応から、ケア効果どのように認識しているか、看護師の認識についての質的研究から構成する概念と要素を抽出し、構造化する。
- (3)目的3: 「気持ちよさ」をもたらす看護ケアの目的、看護ケアに対する患者の反応、家族の反応、看護師の反応を構造化するための量的研究から「気持ちよさ」をもたらす看護師の認識モデルを作成する。

3. 研究の方法

(1)統合的文献レビュー

国内で発表された和文献のみを医学中央雑誌webを用いて、web版で検索が可能になった1981年から2016年3月末までの期間で、キーワードを「気持ちいい」「気持ちよい」「気持ちがいい」「気持ちが良い」「気持ちよさ」に設定し検索した。156件を読み、看護師(または看護師役の援助者)が対象者(健康な人または患者)に対して直接的に行う看護ケアに焦点を当て、52件の文献を分析対象とした。

Cooper(1998)の統合的文献レビューの方法論を参考に、文献番号、タイトル、目的、研究デザイン、対象者、看護ケアの種類、看護ケアの反応・効果、測定指標、特記事項などを整理する情報収集シートを作成した。次に、「気持ちよさ」をもたらす看護ケアの対象者に対する反応・効果について、健康な人を対象とした基礎研究と患者を対象とした臨床研究に分け、反応・効果を構成する要素を気分・心理行動的側面と生理学的側面毎に分類し、共通性や相違点を検討しながらサブカテゴリおよびサブカテゴリを抽出した。反応・効果の測定時期については時系列に沿って整理した。また、測定指標についても基礎研究と臨床研究に分け、反応・効果要素に沿って整理した。

(2)半構成的記述法とフォーカス・グループ・インタビュー

臨床経験5年目以上の看護師を対象として、半構成的記述法とフォーカス・グループ・インタビュー法を用いた。半構成的記述シートの構成は、「気持ちよさ」をもたらしたケアの実践を思い起こし、実施したケアの内容、実施の理由、看護ケアによる患者の反応、実施を通して感じたことであった。半構成的記述シートの構成に沿って、3~4人のフォーカス・グループ・インタビューを60分程度実施し、逐語録を分析した。

(3)看護師の認識についての全国調査

統合的文献レビュー(大橋, 2014)抽出した「気持ちよさ」をもたらす看護ケアの患者への影響・効果要素と半構成的記述法とフォーカス・グループ・インタビュー法から抽出されたケアの内容、目的、患者の反応、家族の反応および看護師の反応についての要素(縄, 2016)を基に、「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識についての質問紙を作成し、全国調査を実施した。

質問紙は、「患者に気持ちよさをもたらした事例のなかで、最も印象に残っている場面を思い起こして」回答する。質問項目は、対象者の特性9項目、事例について10項目、ケアの目的14項目、患者の反応39項目、家族の反応5項目、看護師の反応23項目の合計100項目である。ケアの目的以降の項目は、とてもあてはまる4点、ややあてはまる3点、あまりあてはまらない2点、全然あてはまらない1点で回答する。

全国100床以上の約4,000か所の病院から、都道府県毎の病院数の比率に沿った層化無作為抽出法により約400か所を選定し、協力の返信があった61施設171病棟に質問紙を郵送した。

対象者は内科系病棟、外科系病棟、緩和ケア病棟、回復期病棟に勤務する常勤看護師とした。

4. 研究成果

(1) 統合的文献レビューからケアの患者への効果要素の抽出

「気持ちよさ」をもたらす看護ケアの対象者の反応・効果の測定時期は、ケア実施中、実施直後、実施後、翌日以降の4つに分類された。気分・心理行動的側面の反応・効果要素として、基礎研究では【気分のよさ】【症状の緩和】【活力の高まり】の3つが、臨床研究では【気分のよさ】【症状の緩和】【活力の高まり】【関係性の広がり】【生活行動の拡大】【生活リズムが整う】の6つのカテゴリーが抽出された。測定指標は、質的指標では観察やインタビュー等による言動や表情が用いられ、量的指標では研究者が独自に作成した様々な尺度が存在した。生理学的側面の反応・効果要素としては、【体温上昇】【自律神経活動の安定】【循環動態の安定】などが臨床研究よりも基礎研究で多く見られた。

本研究で示されたケア後の変化に視点を移したとき、「気持ちよさ」をもたらす看護ケアの可能性の広がりや価値が示され「気持ちいい」と感じた後の効果の推移に注目することが重要であることが示唆された。

(2) 半構成的記述法とフォーカス・グループ・インタビューによる看護師の認識モデル(案)作成

対象看護師は12名で、経験年数は、10年未満9名、10年以上3名であった。事例は14事例が語られ、がん患者7名、整形外科患者2名、ICU患者2名、脳外科患者2名、小児患者1名であった。ケアの種類は、清拭、足浴、手浴、洗髪、入浴、温罨法、マッサージ、コミュニケーションであり、ケアの組み合わせもあった。

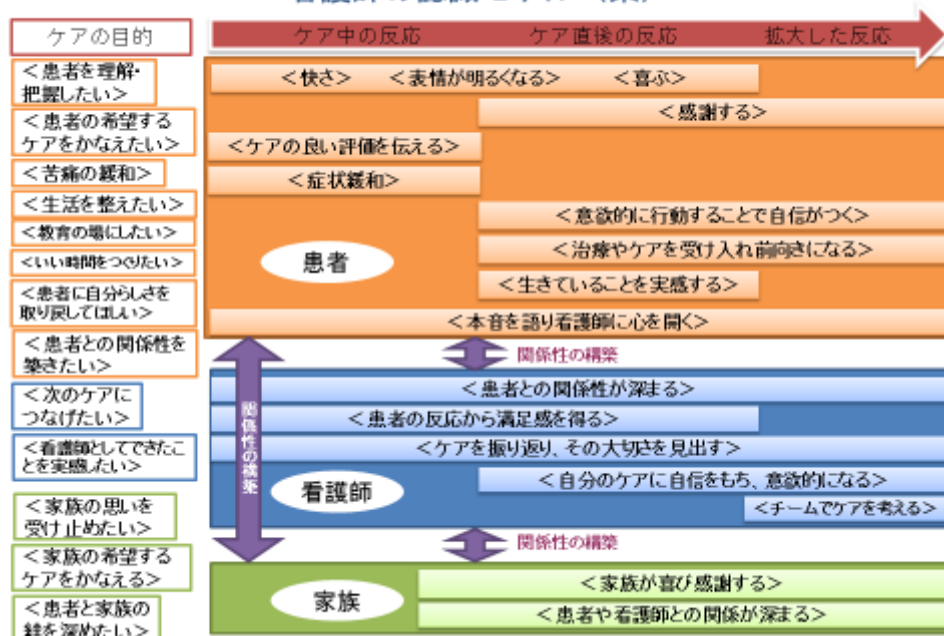
ケアの目的は、38コードから28サブカテゴリー、13カテゴリーが抽出された。患者の反応は、78コードから37サブカテゴリー、10カテゴリーが抽出された。看護師の反応は、38コード、23サブカテゴリー、6カテゴリーが抽出された。家族の反応は、10コードから5サブカテゴリー、2カテゴリーが抽出された。

表1 「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識

ケアの目的	カテゴリー	ケアの反応	カテゴリー
患者への	患者を理解・把握したい	患者	
	いい時間をつくりたい		喜ぶ
	患者の希望するケアをかなえたい		感謝する
	患者との関係性を築きたい		ケアの良い評価を伝える
	苦痛の緩和		本音を語り看護師に心を開く
			快さ
	生活を整えたい		表情が明るくなる
	教育の場にしたい		症状緩和
患者に自分らしさを取り戻してほしい	行動することで意欲や自信につながる		
看護師への	看護師としてできたことを実感したい	看護師	患者の反応から満足感を得る
	次のケアにつなげたい		ケアを振り返り、その大切さを見出す 自分のケアに自信を持ち、意欲的になる 患者との関係が深まる 患者のニーズを満たすことを心がける チームでケアを考える
家族への	家族の希望するケアをかなえる		喜ぶ
	家族の思いを受け止めたい		患者や看護師との関係が深まる
	患者と家族の絆を深めたい		

これらを基に「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識モデル(案)を作成した。看護師は、患者の思いや苦痛症状に関心を向け、苦痛を緩和することでいい時間を共有し、患者との関係性を築き、ケアを通して患者に自分らしさを取り戻してほしいと願っていた。ケアによる患者の反応は、気持ちよさをきっかけに症状緩和がもたらされ、押し殺していた思いを語り、生きる希望や自信や意欲につながっていた。その結果、看護師は、看護に対する満足感やケアの意味を見出し、看護観を育んでいることが示唆された(縄、2016)。

看護師の認識モデル（案）



(3) 看護師の認識についての全国調査

質問紙を 1023 部配布し、回答は 885 部（回収率 86.5%）であった。対象者は、女性が 92.9%、経験年数 5 年未満 17.9%、5 年以上 81.8%であった。思い起こした事例は、慢性期 29.9%、ターミナル期 24.8%、急性期 22.5%、回復期 19.6%であった。ケアの内容（複数回答可）は、清拭 35.3%、足浴 22.6%、洗髪 21.9%、入浴 20.9%、シャワー浴 18.1%、マッサージ 16.3%、手浴 11.9%、整容 10.5%、温電法 3.5%であり、ケアを組み合わせていた。

ケア目的、患者の反応、家族の反応、看護師の反応について因子分析を行った。ケアの目的は、3 因子で構成され、第 1 因子は、“家族と患者の絆をケアに活かしたい”、第 2 因子は、“患者との信頼関係を基に患者の希望をかなえたい”、第 3 因子は、“プロフェッショナルを自負したい”であった。

ケア中、ケア後の患者の反応は、3 因子で構成され、第 1 因子は、“意欲と生活拡大による自信獲得”、第 2 因子は、“気持ちよさに癒された感謝の心”、第 3 因子は、“コミュニケーションチャネルの開放”であった。その後の患者の反応は、3 因子で構成され、第 1 因子は、“意欲と生活拡大による自信獲得”、第 2 因子は、“豊かな対人関係の形成”、第 3 因子は、“爽快感と清潔感”であった。

ケア後の家族の反応は、1 因子で“癒された家族と患者と看護師との絆”であった。

ケア中、ケア後の看護師の反応は、3 因子で構成され、第 1 因子は、“患者理解と患者とともにあるケアへの満足感”、第 2 因子は、“ケアへの自信とケア向上への意欲”、第 3 因子は、“チームでのケアの共有”であった。その後の看護師の反応は、4 因子で構成され、第 1 因子は、“患者理解と患者とともにあるケアへの満足感”、第 2 因子は、“ケアへの自信とケア向上への意欲”、第 3 因子は、“チームでのケアの共有”、第 4 因子は、“看護観の醸成”であった。

全ての因子のクロンバック 係数、0.7 以上であった。

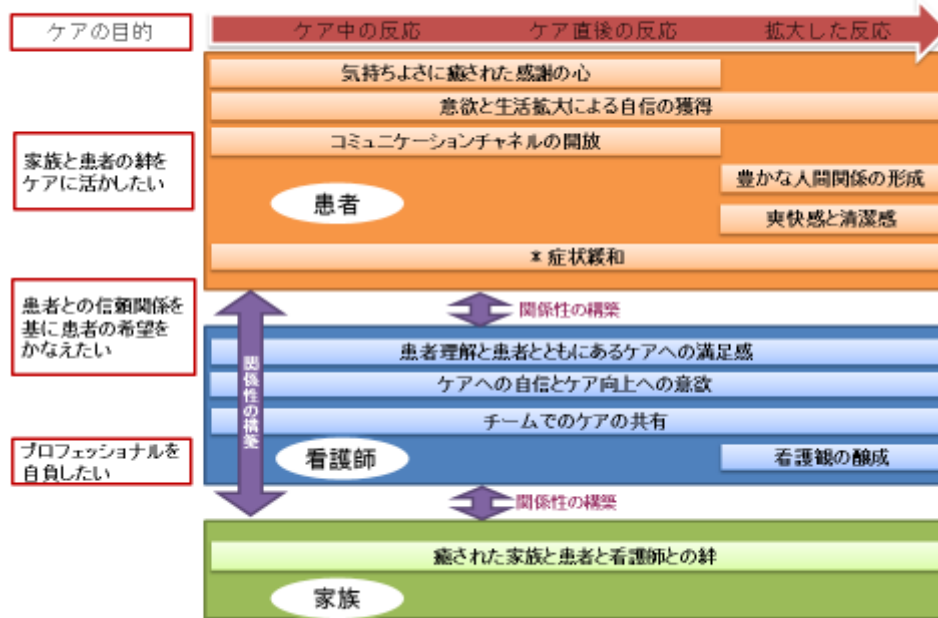
また、多変量解析の結果、ケアの目的や患者の反応・家族の反応・看護師の反応に対して、ターミナル期にある患者では、他の期の患者に比較して目的や反応の得点が低かった。ケアを組み合わせた場合と単独のケアの場合を比較すると、組み合わせのケアが単独のケアより目的や反応の得点が高かった。また、複数回のケアの場合と1回のケアの場合を比較すると、複数回のケアが1回のケアより目的や反応の得点が高かった。

最終的には、以下の図に示すような「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識モデルを作成した。

「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識の構造が明らかになった。これは、国内外において初めてのモデル創出である。日々の実践の中では、患者が気持ち良いと感じたケアは、とすれば「患者に喜んでもらえて良かった」ということで終わってしまうと思われるがちである。しかし、本研究結果からは、看護師はケアの目的のみならず患者や家族の反応からケアの効果を広く見出し、また、自分自身のケアの価値や看護観を育むことまで意識していることが明らかとなった。今後は、患者の状態、ケアの種類、ケアの頻度、看護師の経験年数などの違いによって、ケアの目的、患者の反応、家族の反応および看護師の反応がどのように違うのかを検討して行きたい。

また、今後は、ケアを受ける患者を対象とした実証研究により本モデルの検証を行い、「気持ちよさ」をもたらす看護ケア理論の開発に繋げて行きたい。

「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識モデル



<引用文献>

佐居由美、一般病棟熟練看護師が実践する安楽な看護のプロセス、2011年度聖路加看護大学大学院博士論文

縄秀志、看護実践における「Comfort」の概念分析、聖路加看護学会誌、10(1)、2006、11-22

大橋久美子、縄秀志、佐居由美、国内における「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに関する統合的文献レビュー、日本看護技術学会、16、2017、41-50

縄秀志、矢野理香、佐居由美、「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識モデルの検討、日本看護技術学会第15回学術集会、2016

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

大橋久美子、縄秀志、佐居由美、矢野理香、樋勝彩子、櫻井利江、国内における「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに関する統合的文献レビュー、日本看護技術学会、査読有、16、2017、41-50

縄秀志、「気持ちのいい」ケアを教えよう!、看護教育、査読無、57、2016、338-345

縄秀志、矢野理香、佐居由美、大橋久美子、樋勝彩子、気持ちよさをもたらす看護ケア理論の開発に向けて、日本看護技術学会、査読無、15、2016、25-30

大橋久美子、「快適離床ケア」で1人ひとりの朝を創ろう、看護教育、査読無、57、2016、346-351

樋勝彩子、ケアを通して関係性が深まる、看護教育、査読無、57、2016、352-355

矢野理香、語りを引き出し希望をつなぐ、看護教育、査読無、57、2016、356-361

[学会発表](計10件)

縄秀志、安全と安楽のジレンマ：安楽は安全を導く、日本看護技術学会第17回学術集会、2018

樋勝彩子、縄秀志、佐居由美、矢野理香、大橋久美子、櫻井利江「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識 - 全国調査の分析 その1 -、日本看護技術学会第16回学術集会、2017

縄秀志、矢野理香、佐居由美、大橋久美子、樋勝彩子、「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する患者の反応 - 看護師の認識に対する全国調査報告 -、聖路加看護学会第22回学術大会、2017

Rika Yano, Yumi Sakyo, Hideshi Nawa, Kumiko Ohashi, Ayako Hikastu, Toshie Sakurai, Effect of alleviation of symptoms in nursing care of that impacts "Comfort" as perceived by nurses, International Nursing Research Conference 2017

縄秀志、「気持ちよさ」の研究を通して見えてきた看護の力、日本統合医療学会第21回学術集会、2017

縄秀志、矢野理香、佐居由美、大橋久美子、樋勝彩子、櫻井利江「気持ちよさ」をもたらす看護ケアに対する看護師の認識モデルの検討、日本看護技術学会第15回学術集会、2016

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

気持ちよさをもたらす看護ケア理論の創成 <http://www.comfort-care.net/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：本城 由美 (佐居 由美)

ローマ字氏名：(HONJYO, Yumi)

所属研究機関名：聖路加国際大学

部局名：大学院看護学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：10297070

研究分担者氏名：樋勝 彩子

ローマ字氏名：(HIKATSU, Ayako)

所属研究機関名：聖路加国際大学

部局名：大学院看護学研究科

職名：助教

研究者番号(8桁)：30759147

研究分担者氏名：矢野 理香

ローマ字氏名：(YANO, Rika)

所属研究機関名：北海道大学

部局名：保健科学研究所

職名：教授

研究者番号(8桁)：50250519

研究分担者氏名：矢内 久美子 (大橋 久美子)

ローマ字氏名：(YAUCHI, Kumiko)

所属研究機関名：姫路獨協大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：40584165

研究分担者氏名：櫻井 利江

ローマ字氏名：(SAKURAI, Toshie)

所属研究機関名：東京医科大学

部局名：医学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：80254473

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。